様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ６ 月　 ６ 日現在

機関番号：１１２０１
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2011～2013
課題番号：２３５３０９７８

研究課題名（和文）戦前・戦後東北における北方性教育運動の展開に関する調査・研究

研究課題名（英文）Research on educational movement in the northeast(Hoppousei Kyouiku)

研究代表者
土屋　直人（Tsuchiya, Naoto）

岩手大学・教育学部・准教授

研究者番号：１０３１８７５１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　3,300,000円、（間接経費）　990,000円

研究成果の概要（和文）：第１に、各県教育研究所等の資料室に赴き、各実践者の、生活綴方教育実践に関する未発掘資料、未検討の第一次史資料（学級文集、等）の探索・収集、分析検討を行った。第２に、特に戦後東北生活綴方実践における理論的支柱の一人、青森の橋本誠一氏らに、戦後東北の作文教育の歩み、橋本氏らの実践の展開等について聞き取りを行った。第３に、本調査研究着手直前に東日本大震災後が発生したが、東北沿岸被災地の生活綴方実践の中での、戦前から続く北方性教育運動の伝統継承の如何を検証すべく、東北民教研、東北作文の会等に赴き実践報告を聴取し、現場教師たちの被災地での生活綴方教育実践の実際と意義についても調査・考察を進めた。

研究成果の概要（英文）：This research aimed at exploring movement toward "north educational movement (Hoppousei Kyouiku Undou)" of the time from the prewar days to the postwar period. This research clarified northeastern (Touhoku) educational movement and basic character of educational practice "which writes a life (the composition education, Seikatsu Tsuzurikata)." It was investigated how the teachers of northeast each prefecture would have developed educational movement of writing the life after the war. It asked Mr. Seiichi Hashimoto of Aomori who drew the composition education in the northeast after the war about the fact of northeastern composition education movement after the war.
And I investigated the fact of the composition education in the coast after the Great East Japan Earthquake.I went to the study group of the meeting of a northeast composition, heard the practice report, and considered the practical meaning which the education has.

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学・教育学

キーワード：北方性教育　生活綴方　教育実践史　教育運動史　教育方法

１．研究開始当初の背景

本研究は、戦前・戦後東北における北方性教育運動の展開とその実像を調査し、実証的に検討することをめざしたものである。特に、昭和戦前期東北の北方性教育運動、生活綴方教育実践の特質へ理解の上に立って、戦後東北の教師たちが、それをいかにその教育実践・運動の中で継承し発展させてきたのかという問題意識から、「北方性教育の遺産の継承・発展」を標榜する「東北民教研」、その生活綴方教育実践に着目し、戦後東北の民間教育研究運動の展開における北方性教育運動、とりわけ生活綴方（作文教育）実践の実像と特質に、＜地域に生きる教育実践者の営み＞という視角から迫ろうとしたものである。

「北方性教育運動」とは、一般に、1929（昭和 4）年 6 月の成田忠久による秋田の「北方教育社」の創設、及び翌 30 年 2 月の『北方教育』の創刊（～第 16 号・1936.2）にはじまる「北方教育」運動から、1934（昭和 9）年 11 月の「北日本国語教育連盟」の結成、及び翌 35 年 1 月の機関誌『教育・北日本』の創刊（～第 3 号・1936.5）、さらに、同連盟の名による「北方性とその指導理論」（『綴方生活』1935.7）に示された〈狭義の〉「北方性」教育運動までの幅をもった、生活綴方を中心とする教育文化運動である。東北 6 県（青森、秋田、岩手、山形、宮城、福島）には、この北方性教育運動という、特有の共通した地域環境・社会構造（北方「生活台」）の中で一群の「北方教師」たちが生み出した生活綴方教育実践の歴史があった。児童の生活現実に立脚し、その生活をありのままに綴らせ社会的事実をリアルに見つめさせ、また学級文集を用いた話しあいを通して生活意欲と協働性を高めようとした営みである。そしてこの東北には、この戦前北方性教育運動や生活綴方教育実践を継承する豊かな戦後教育実践があり、それらは戦後東北における民間教育運動・実践と連続し、今日まで脈々とその伝統が継承されてきた歴史がある。しかし、それらは、これまでの教育実践史研究において着目されることが乏しく、調査・検討に未着手の部面が多くある。

本研究は個々の教師のみならず、その連帯・協働の表れの一つである「東北民教研」（東北地区民間教育研究団体合同研究集会）の展開にも着目する。毎年夏、東北 6 県の民間教育サークルの教師及び退職者らが集いともに学びあうユニークな性格を持つ東北民教研は、来年度に 60 周年を迎える。第一回大会（於・仙台）は 1952（昭和 27）年、「教育科学研究会」の東北地方大会として開催された歴史をもつ（以後第 8 回集会（1959）まで教科研東北大会の名称）。30 周年には記念誌『北方教育　その継承と発展』（あゆみ出版、1983 年）を、50 周年には同『北の大地にねざして』を発行している。本研究では、北方性教育運動が、戦前・戦中と「中断」することなく、〈北方教育の遺産の継承と発展〉を掲げ活動してきた東北民教研に引き継がれたという、〈戦前～戦後教育の連続性〉の視点を採る。「北方教師」たちはその生活綴方教育実践を通して、東北の地域に根ざす「北方性教育運動」を自らの力でその教師同志の協働と連帯のもとに生み出してきた。その実践・運動史を探ることは、教育実践史研究として、「日本の教育遺産」（川合章）、今日までの日本の戦後教育実践の豊富な背景、その蓄積と理論を検証・解明する作業に連なるものと考えられる。

これまで、東北（特に秋田）における北方教育の歴史に関する研究には、戸田金一氏（元秋田大学教授）らの一群の仕事がある。また、佐々木昂や加藤周四郎、村山俊太郎らの北方性教育論・生活綴方実践史に関する研究には、例えば佐藤広和氏、志摩陽伍氏、村山士郎氏らの教育実践史・運動史研究のアプローチからの研究の蓄積がある。ただし戦前東北の北方性教育運動、生活綴方教育実践を継承する、戦後の東北における民間教育運動・実践の実像についての調査、教育学的研究は体系的かつ綿密に尽くされているとは言い難く、更なる未発掘資料の収集と、個々の実践者の実像に迫る検討の余地が残されている。更に上記の諸研究では、「北方性教育の遺産の継承と発展」を標榜し実践研究を続けている東北民教研の展開過程や、戦後東北の生活綴方実践の実態について、広範に着目・考究がなされているわけでは必ずしもなく、戦後の「北方教師」らの実践やその全体像の実証的検討、また関連の史資料の発掘は未だ十分になされていない。例えば吉田六太郎や永井庄蔵（岩手）の他、橋本誠一や津田八洲男（青森）らのようにこれまで教育実践史研究上大きく焦点が当てられてこなかった 1970 年代以降に実践や教育言説の場で活躍した各地の生活綴方教師や、研究がほとんど未着手の言わば埋もれた無名の注目されるべき東北民教研の実践者らが多くあり、彼ら東北 6 県の教師には横のつながり、連帯と協働の豊かな実相があった。

２．研究の目的

本研究は、上記の課題意識から、戦前・戦後の豊かな教育実践史とその今日的意義を解明する作業の一端を担うことを目指すものであり、特に東北の教師たちがその「生活台」の足場から教育の営みを創り出してきた教育実践史、昭和戦前期から戦後にかけての東北における生活綴方教育実践、北方性教育運動の教育遺産に着目し、それらの実像とその今日に至る展開過程についての実証的な調査・研究を試みるものである。即ち、昭和戦前期の北方性教育実践の実像、および戦後における同運動の遺産の継承・発展の展開、特に生活綴方教育実践の実際と全体像を探り、戦前～戦後の東北における北方性教育運動の連続性と広がりの実像に迫る作業を行

い、戦後東北の教育実践・運動の蓄積の実像とその今日的意義の解明を試みた。昭和戦前期の東北の北方性教育運動、生活綴方教育実践が、東北民教研などの、戦後東北の民間教育研究運動・実践とどのような関連やつながりを持っていたのか、またそれら戦前の北方性教育の遺産が、戦後の東北民教研の実践の成立・形成やその「北方性教育の遺産の継承・発展」の内実にどのような影響を与えていたのかを、具体的な実践の展開過程や各教師のライフヒストリー、理論的知見等に着目し実証的に検討することにより、その実践営為の蓄積が今日の学校教育・教師と子どもの困難、多様な教育課題に与える示唆を見出すことを目指したものである。

ただし、本研究課題の申請時での当初計画（2010・平成 22 年 11 月）段階では、歴史研究（教育実践史研究）としての研究方向・課題意識が強く、第一次資料収集と聞き取り調査を中心に作業を進め、その成果を蓄積し分析を進める予定としていた。この基本的視点は本研究の中で変更されることはなかったものの、本研究課題の着手の直前、2011（平成 23）年 3 月 11 日、「東日本大震災」が発生した。それ以降、本研究の果たす意味や、特に東北の地域教育実践にとっての生活綴方・北方性教育の有する今日的課題性など、緊急かつ根源的な課題にあらためて考究を深めることが求められた。東日本大震災以降における、本研究の果たす意味、特に東北の地域教育実践にとっての生活綴方・北方性教育の有する今日的課題性など、本研究とかかわる今日的課題とあわせて作業方向を吟味し、調査を進め、考究を更に深めることを試みることもまた、課題とされた。具体的には、民間教育研究運動を担う東北の（特に津波被災・原発災害を被った、岩手、宮城、福島の太平洋沿岸の現場教師たちの）、生活綴方・作文教育に関係する退職教員や現場教師らの実践報告の聴取も複数の方を対象に、震災後の北方性教育運動の姿を被災地での生活綴方・作文教育の実践のなかに確かめる作業を進めることを試みることとした。

３．研究の方法

本研究では、検討対象地域を北方性教育運動・実践の場・東北 6 県とし、また対象とする時代を昭和戦前期から戦後にかけてとし、図書館等関連施設や研究会等での実地での第一次史資料の収集、教師らへの聞き取り調査等を通して、東北の「地域に根ざした」創造的な実践を展開した生活綴方教師たちの戦前・戦後における教育営為、戦後東北民教研の展開過程、更にその北方性教育運動の教育営為を推進（継承・発展）した個々の教師の足跡や実践・理論の実像を調査・考察する。

本研究においては、具体的に以下の 4 つの基礎作業枠を設定した。

（１）文献による基礎研究：　本研究主題に関連する先行諸研究（生活綴方教育史、教育実践史研究等）の検討とあわせて、戦前・戦後の北方教師たちの実践、東北民教研の足跡について、公刊された著作・諸資料を収集し、同時代及び後時代の視点から基礎的事実を整理し、運動・実践の特質を分析検討する。

（２）戦前・戦後東北における北方性教育運動に関する未発掘資料の収集・分析検討：未発掘資料の存在を探り、特に埋もれている貴重な実践・運動関連資料を発掘・整理する。東北 6 県各地域における実地調査（各実践者及びその関係者、各関係機関等に協力依頼）から、第一次史資料（地域教育雑誌・同人誌、教育実践記録等）の収集を行い、その分析・検討を実証的に行う。

（３）戦前・戦後東北の北方性教育、生活綴方教育を担った実践者に対する聞き取り調査：　毎年行われる東北民教研に参加し、議論の動向とその掲げる歴史的理念を調査・考察する。そして、戦前～戦後に東北 6 県において北方性教育運動、生活綴方教育実践を担った教師たち、戦後東北民教研に参加した教師らを対象に、当時の実践や内部議論に関する聞き取り調査を行い、その分析・検討を行う。その際、各実践者のライフヒストリーに関する調査をも心掛け、その実践・運動の足跡についても聞き取り調査を行う。また各県公立図書館・小中学校等関係諸機関にも人物紹介等の調査協力を依頼する。

（４）東日本大震災後の東北地域における教育実践における、北方性教育運動の継承の実際に関する調査・検討：　昭和戦前期東北の地で生まれ、戦後に続く教育文化遺産である「北方性教育運動」の精神が、震災後、沿岸被災地の現場教師やその生活綴方実践の中にいかに継承されているかを、民間教育研究団体の研究集会での実践報告を聴き、また聴き取り調査を行うことで調査・把握し、その実態を分析することを試みる。

４．研究成果

本調査・研究では、研究期間の 3 年度内において、具体的に以下の 3 つの作業を進めた。

（１）文献による基礎研究：戸田金一らの先行諸研究の検討とあわせ、主に以下の各実践者の実践の足跡と実際について、同時代及び後時代の著書・雑誌論文等を中心に基礎的事実を整理・収集、検討した。（青森：土岐兼房、三上斉太郎、秋田：加藤周四郎、佐々木昂、山形：村山俊太郎、国分一太郎、等）。また、戦後において北方性教育運動を継承する実践者、特に戦後生活綴方・作文教育を実践した教師たちの著書・論文を講読・分析し実践の実態の考察を進めた。それらの成果の一部は、下掲の〔雑誌論文〕③・④、〔図書〕①・②として発表した。

（２）戦後の北方性教育、生活綴方教育実践に関する未見の第一次資料の探索、収集・分析検討：本年度は、山形県教職員組合（山形県国民教育研究所）資料室に赴き、真壁仁、無着成恭、剱持清一や土田茂範ら、更に岩手

の永井庄蔵や吉田六太郎、菅原恭正、に関する第一次資料を閲覧・収集した。また、青森県教育研究所資料室や秋田大学附属図書館「北方教育資料室」等に赴き、秋田の鈴木正之や花岡泰雲、青森の平山栄蔵や橋本誠一ら、戦前・戦後生活綴方教師の実践に関する第一次史資料（地方教育雑誌記事、同人誌、学級文集、教育実践記録等）の閲覧・収集と分析を行った。これらの成果の一部は、〔学会発表〕①、〔図書〕①として発表した。

（３）戦後生活綴方教育実践に関する聞き取り調査：東北民教研集会に参加し、その運動の骨子について参加者の報告や質疑から調査するとともに、東北民教研の中心的人物の動向や各年度の集会内容の概要を通覧しその特質を考察した。また、東北６県において生活綴方教育実践を担った教師らに、当時の実践の実態に関する調査を行うべく、特に、戦後東北作文教育における理論的支柱の一人であり、青森県作文教育における代表的実践者である橋本誠一氏、ほか数人を対象に、戦後東北の作文教育の歩み、橋本氏らの実践の展開等についての聞き取り調査を行い、あわせて関連第一次資料を閲覧・借用し分析した。その成果の一部は、〔学会発表〕①②、〔図書〕②③として発表した。

（４）東日本震災後の生活綴方教育実践の今日的動向と北方性教育運動の実際的展開についての調査：震災後被災地の生活綴方実践（者）の中に、戦前から続く「北方性教育運動」の伝統がいかに継承されているか等についても検証・考察を進めようとの問題意識から、民間教育研究運動関連の全国研究集会のほか、今日の現場教師たちが開催している研究会（東北民教研（夏）のほか、岩手民教研（冬）、東北作文の会集会（秋）、岩手県教職員組合教研集会（秋）、等）に毎年赴き、福島の白木次男氏、青森の工藤ふみ氏らの生活綴方実践報告と討議に参加し、三陸沿岸被災地における教師たちの営みと学校の実態と復興への取り組みの一端を聴取した。そして、震災後の学校教育の実態に関する関連資料収集・整理とあわせ、東日本大震災後における三陸沿岸被災地での生活綴方教育実践、震災直後の学校教育実践等についても実践報告・発言を広く聴取し、関連資料を調査・収集した。そこには、津波被災・原発災害のなかで生活綴方実践を行う「北方教師」たちの営みがあった。それらを聴き取り、〈震災と教育〉をめぐる根本的課題を探るべく考察を行った。これに関連する研究成果の一端として、〔雑誌論文〕①・②・③がある。（これらについての、更なる関連研究成果については、次年度以降に論文・学会発表等にて公表する予定である）。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計４件）

① 土屋直人、震災後「政治教育」を問い直すために―岩手三陸沿岸の被災とその後から考える―、『民主主義教育 21』（全国民主主義教育研究会編）、査読無、Vol.8、2014、138-147

② 土屋直人、歴史教育・社会科教育の動向（第１章　津波・原発被災と教育実践の方向）、『歴史教育・社会科教育年報 2013 年版』（歴史教育者協議会編）、査読無、2014、166-171

③ 土屋直人、地域に生きる「生活者」としての子どもと学力―北方性教育運動の視点から―、『教育』（教育科学研究会編）査読無、2013、5-15

④ 土屋直人、社会科教育学における理論研究の動向―2010 年度の関連学会誌等から―、『社会科教育研究』（日本社会科教育学会編）査読有、第 113 号、2011 年、107-118

〔学会発表〕（計２件）

① 土屋直人、橋本誠一の生活綴方実践についての一検討―1950～60 年代を中心に―、日本教育方法学会第 48 回大会、2012 年 10 月６日（土）・７日（日）、於：福井・福井大学地域教育科学部

② 土屋直人、臼井嘉一、北方性教育運動と「生活綴方的教育方法」（２）―東北民教研の実態調査から―、日本教育方法学会第 47 回大会、2011 年 10 月１日（土）・２日（日）、於：秋田・秋田大学教育文化学部（手形キャンパス）

〔図書〕（計３件）

① 臼井嘉一監修、三恵社、『戦後日本の教育実践―戦後教育史像の再構築をめざして―』（共著）（土屋直人、「第 10 章　土田茂範の生活綴方教育の歩み―戦後東北・山形の地域教育実践の一つの姿―」）、2013、318（182-202）

② 日本公民教育学会編、第一学習社、『テキストブック公民教育』（共著）（土屋直人、「第２章第１節　戦後における公民教育の展開」）、2013、240（24-32）

③ 二谷貞夫ほか編、学文社、『中等社会科ハンドブック―〈社会・地歴・公民〉授業づくりの手引き―』（共著）（土屋直人、「第２章第14節　社会科における学力とは何か、またどのような学力をつけたらよいか」）、2013、158（40-41）

６．研究組織

(1)研究代表者
土屋　直人（Tsuchiya, Naoto）
岩手大学・教育学部・准教授
研究者番号：10318751

(2)研究分担者　　なし
(3)連携研究者　　なし